

Q1 印象に残っている言葉は？

A1

今よりも、もう少し
「先」を見なさい

小学生の頃から社会問題の解決に貢献したいと漠然と思っていました。高校生の時、エイズやエボラ出血熱が世界的な問題となっていて、これを解決したいと、空気感染の研究者がいる大学へ進学しました。エボラ出血熱の研究をしている先生に相談に行くと「その問題は今、多くの人認識している。あなたが研究者になる頃にはある程度解決されているから、もう少し先の問題を見なさい」と諭され、一瞬にして目標を見失いました。何を目指したらいいかまったくわからなくなったのですが、学会などでいろいろな人の話を聞くことにしました。中でも偶然参加した学会で植物の重要性に興味を持ち、この世界に飛び込みました。大学院で始めた植物内の情報伝達の研究が、今の研究につながりました。出合ったことを運命と思い、テーマの重要性や可能性を発信していくことを大切にしています。

Q2 研究テーマを一言でいうと？

A2 接ぎ木の仕組みを解明し、
食料生産に貢献

接ぎ木は異なる植物をつなぎ、それぞれのいいところ取りをする技術です。2000年以上の歴史があり、生態や自然環境への影響も少なく農業には不可欠となっています。ただし、異種の植物同士では拒絶反応などが起こり、遠縁だと接ぎ木はできないと考えられていました。それが可能であることを偶然発見したのは留学中のことです。研究費不足で思うような研



さきがける 科学人

vol.88

出合ったものを 運命と思い 大切に伝えていく

名古屋大学 生物機能開発利用研究センター
准教授

野田口 理孝

Michitaka Notaguchi

Profile

東京都出身。2009年 京都大学大学院理学研究科博士課程修了。博士(理学)。カリフォルニア大学研究員やERATO東山ライブホロニクスプロジェクト研究員、名古屋大学大学院理学研究科特任助教、JSTさきがけ研究者、名古屋大学大学院生命農学研究科助教を経て、19年より現職。



究ができない中、どうにか成果を出さなければと、手元にあった植物を手当たり次第にモデル植物であるタバコに接ぎ木したところ、遠縁の植物とつなぐことに成功しました。今は、植物科学の知見を背景に接ぎ木技術を改良するなど、品種改良や育種作業をより早く簡単にするための研究を進めています。地球温暖化の影響で、将来、食料危機が起こるといわれています。この技術が気候変動に伴う地域ごとの環境負荷の問題を解消し、持続可能な農業と食料生産に貢献できると考えています。

Q3 今後の目標は？

A3 植物の声を聞く技術を
開発したい

農業分野では、植物工場や厳しい自然環境で植物の栽培体系をどう作っていくか、新しい挑戦が始まっています。植物にも「今、花を咲かせてもいいのかな」「ここ、虫に食べられた」など、自身が置かれてい

る状況を判別する機能があることがわかってきました。葉っぱが虫に食べられていることを他の葉や花に知らせる時に、植物の体内ではある物質が動いています。それを検出できれば、水や栄養が足りているのか、栽培方法に満足しているのかなど、植物の声を聞けるかもしれません。コミュニケーションから相手を知ることは大切です。将来、「この方法、とてもいいよ」と栽培方法を植物に直接聞くことができる、こうした技術を開発していきたいですね。

休日は子供たちを連れて野山に出かけています。子供たちも自然に興味を持ってくれたらと願っています。



リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

R70

古紙パルプ配合率70%再生紙を使用

JSTnews

August 2019

発行日/令和元年8月9日

編集発行/国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)総務部広報課

〒102-8666 東京都千代田区四番町5-3サイエンスプラザ

電話/03-5214-8404 FAX/03-5214-8432

E-mail/jstnews@jst.go.jp JSTnews/https://www.jst.go.jp/pr/jst-news/



最新号・バックナンバー